

高部の 獅子舞

高部獅子舞保存会長

廣田 秀久



高部^{たかべ}厳島神社^{いづくしま}に伝わる獅子舞は神楽舞である。約300年前に始まったとされていますが、日本の獅子舞がいつごろから始まったのかが分からないのと同じく、それは今のところ不明とせざるをえない。しかし、その始まりに伊勢の太々神楽との出会いがあったことは間違いない。

今から341年前の江戸時代中期、天和3年3月9日(1683年)、波止浜^{はしはま}に松山藩によつて広大な入浜式塩田が完成した。この良質の塩の生産は、米の15万石に値するといわれ、松山藩の財政を豊かなものとした。

波止浜の湾は天然の良港で、塩の積み出しや参勤交代にも使われていた。その後の日本の10州(国)塩に数えられるまでに至った。そして塩



狩人の舞

田の完成まもなく、塩の豊作祈願のため伊勢の太々神楽の招聘が始まった。

1984年に獅子舞の調査をおこなった記録によると、「子どものころに太々神楽が来て、塩田で奉納しているのを見たことがある」という話の記録が残っている。太々神楽の一行による獅子舞の奉納は、その後も続けられ、明治期まで訪れていたといわれる。その構成は、太鼓、横笛、鐘、獅子使い、チャリ(道化師)といった出で立ちで、6人から7人のメンバーで、獅子舞の道具を納めた台車を引いてやって来て、チャリが面白おかしく「舞」や「曲」の紹介をし、塩田

の5、6箇所^{5、6箇所}で獅子舞を奉納していたという。太々神楽の奉納は一日だけであったが、多くの人々が参拝に訪れ大変賑やかであったそうである。

奉納が終わると、無病息災を願って先をあらそうようにして、獅子頭で頭や肩といった体の一部を噛んでもらっていたそうである。これが「頭噛み」の風である。この風習は高部の獅子舞にもみられる。この太々神楽の奉納を見た氏子が感激し、「自分たちでも氏神様に奉納しようではないか」ということになったのであろう。

高部厳島神社の高部の獅子舞のルーツはここにあり、今から約300年余りの昔に始まったとされる所以である。このことから高部厳島神社に伝わる獅子舞が発祥の地であるとされている。また、近隣の神社からの要請により、高部の獅子舞を伝授したとされている。

高部の獅子舞の種類は大きく分けると「場使い」と「継獅子」とになる。「場使い」は、獅子頭に「ユタン」と呼ばれる幌をつけ、この中にたくさん^{たくさん}の使い手が入って舞う獅子舞のことであり、「継獅子」は獅子頭を頭にかぶった獅子^{しし}児が、もう一人の大人の肩の上に立ち、獅子舞を舞う獅子舞である。太々神楽の「魁曲」と呼ばれる「曲」にヒントを得たものである。

私達の遠いご先祖様は、「神様は天において、私達の生活や村を見守っていただいているのだ」、そして「神様に獅子舞を奉納することによって、神様にお勇みいただき、より一層の豊作と村の安全を守っていただきたい」と考えていた。このことから「身も心も神様に近づきたい」という神を敬う強い気持ちから、上へ上へと

継いでいく立体的な「継ぎ獅子」へと発展させ、「二継ぎ獅子」「三継ぎ獅子」を誕生させた。また、頂点には神様からの授かりものである子どもを「獅子児」として立てた。

「獅子児」は、村を継いでいく大事な宝物であり、そこには「神様からの授かりものである獅子児を、氏子が心を一つにして一致協力し、支えます、村を守っていきます」という氏子の決意と団結を神様の前に誓い、身をもって明らかにしたのである。

このように継ぎ獅子は、人々の神様への厚い思いによって、始められ伝えられ、今日にいたっている。

「高部の獅子舞」は、1984年8月13日「今



獅子児たちによる使い込みの獅子舞



二継ぎの獅子舞（雌獅子の舞）

治市無形民俗文化財」の指定を受け、2000年4月18日「愛媛県無形民俗文化財 今治越智地方に伝わる獅子舞 高部厳島神社に伝わる獅子舞」の指定を受けた。これは高部の、また今治市民の永年の念願であった。

1969年4月1日当時、高部の獅子舞は7年間途絶えていた。また、御神輿も境内の御旅所のみで執り行われるといった祭りであった。

1970年に「高部の獅子舞再興準備会」を発足させ、1971年高部獅子舞保存会を発足し、同年の5月13日高部の獅子舞を再興し奉納する念願がかなった。

この当時は、約7年ぶりに再興がなった獅子

舞の奉納にたくさんの方々が来られ、境内を埋めつくし、獅子舞を奉納する場所も埋め尽くされるほどであった。

この当時の波止浜の人口は一万人を超えていた。筆者の小学校時代は1クラスが50人近くで4クラスあり、同級生は200人近くであった。中学校では波方町と共立であったため10クラスとなり、1学年で500人近く、全校生徒は1500人にもなり、マンモス中学校であった。それから60年余りが過ぎ去り、令和の今日、波止浜小学校に入学する子どもたちは、20人ほどとなり、波止浜地区の人口も5000人を割り込んでしまった。

子どもも大人も沢山いて賑わっていたお祭りも獅子舞再興当時とは全く様変わりをしてしまった。

人口が半数以下になり、新しく小学校に入学する子どもたちが10分の1になった今日、どのようにして伝統のある高部の獅子舞を維持し守っていくかがのしかかっている。

波止浜小学校区は、3地区があり、それぞれに獅子舞が伝わっている。20人の内半数が女の子であるとした場合、男児が10人しかない。この10人が均等にそれぞれの獅子舞に属したとしても、各団体には3人しかないこととなる。更にはこの3人の内何人が獅子舞に参加し、受け継いでくれるかという大きな問題が存在する。

幸い高部の獅子舞は、今年も幼稚園児から小・中・高校生まで含め20人の獅子児を擁することができた。奇跡に近い。これも獅子児のお母さん方の呼びかけに、子らが応じてくれたから実現できた。

獅子児たちは、練習が始まると毎日19時から21時まで神社に集まり練習を繰り返す。獅子児を連れてくるのはお母さん達であり、兄弟の子どもたちも共に参集する。お父さんは、仕事を終えてそのまま食事をする間もなく練習に駆け付ける。獅子舞中心の生活モードとなる。春祭りで約40日間、夏の市民の祭りで30日間、冬12月の県民文化祭参加で30日間、合わせて年に1000日間の練習スケジュールとなる。

現在は、波止浜小学校だけでは学校の野球部も活動できず、何校かが一緒になって活動をするという現実がある。

このことは、単に波止浜地区だけの問題ではない。

郷土に伝わる獅子舞にとつては、今後維持できるか、存続ができるのかといった前代未聞の状態にある。

このことから、獅子児は男児と決まっていたが、女兒にも継獅子はできないが、演目を限定し参加ができるように改めた。

2023年5月に初めて、高部の獅子舞を広く市民に体験してもらおうという試みを、今治市の中心部の広場において開催した。今治市の広報誌に掲載し、地域を問わず親子での参加を呼びかけた。

わたし達には、高部地区だけではなく市民全体が獅子舞に興味を持ち、今治地方における代表的な郷土芸能に正面から向き合っていただき、将来につながればという強い願いがあった。

何十年か昔であれば、獅子舞の太鼓が聞こえただけでたちまち人だかりができ、その場が埋め尽くされたものだったが、全く様変わりをし



三継ぎ獅子の舞

てしまつて、日曜日にも関わらず、人通りがないことには一抹の不安を抱えていた。開催の時間が迫り、たくさんのお母さんが来てくれたことに、正直安堵した。

参加してくれた親子と獅子児たちで二時間余りの楽しい触れ合いができた。今回が初めてとなったが、お母さん達がすごく積極的で、心強く感じたところである。

しかし、今年度すでに継ぎ獅子が実施できない団体も見受けられるなど、どこの神社に伝わる獅子舞も危機感を覚えている。

高部の獅子舞は、演目が13演目あり、約五時間近くに及ぶ演目すべてについて保存伝承を行ってきたが、今後においては、維持することが困難になることもあり得る。

また、学校のクラブ活動のように他校と一緒に活動を行うというようなわけにもいかない。演目や所作が異なる事や、祭礼日が同じであることがあり、文化財保護上からもそのようなわけにはいかない。

高部厳島神社に伝わる獅子舞は、獅子舞発祥の獅子舞である。今の子どもたちが、このことを誇りに思い受け継ぎ、次の世代へと伝承してくれることを願うばかりである。

高部の獅子舞再興から50有余年になり、今後ますます氏子が一体となって保存伝承に力を注がないと獅子舞のみならず、祭礼の運営も難しくなってくる。危機感を持つ今日この頃である。



獅子児たちによる打ち上げの獅子舞